

ペスタロッチーの『クリストフとエルゼ』における教育論

福田 博子

Educational Thoughts of J. H. Pestalozzi's "Christoph und Else"

FUKUDA, Hiroko

キーワード：居間 (livingroom) 学校の家庭化 (school as a family) 親心・子心 (parental and filial spirit)

目 次

- 1 はじめに
- 2 時代的背景
- 3 『クリストフとエルゼ』における教育論
 - (1) 居 間
 - (2) 教師論
 - (3) 道徳的教訓
- 4 おわりに

1 はじめに

児童虐待、いじめ、学校の管理教育等、教育をめぐる事件があとを絶たない。そこで、古典ではあるが、家庭教育を重視した教育者の一人、ペスタロッチー（1746～1827年）の教育論を振り返ってみたい。今日の教育問題を解決するための何らかの手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

ペスタロッチーが著作の一つ『クリストフとエルゼ』（Christoph und Else）を執筆したのは、1782年、36歳の時であった。彼はこの作品を発表する前に、1781年『リーンハルトとゲルトルート』（Lienhard und Gertrud）の一部を著わし、好評を博したのであった。彼はこの書を民衆の書として、国民を啓蒙するつもりで執筆したにも拘わらず、人々は娯楽小説として読み、楽しんだのである。

そこで、ペスタロッチーは『クリストフとエルゼ』を第二の民衆の書（Mein zweites Volks Buch）として、人民を教え諭す意図を持って執筆したのである。しかし、人々はこの書を退屈極まりないものとして、何の関心も持たなかった。

とは言え、この書には彼の教育論の根底になるものが明確に打ち出されている。ペスタロッチー研究者の書物にも、この書について論じられているものは少ない。ここで、この作品における教育論を考察したいと思う。

2 時代的背景

この時代、子どもはどんな状況に置かれていたのでしょうか。

18世紀でさえ、母親は自分の子どもに対して反応を示さなかったという。当時は、食料事情が悪く、また保健衛生も不備で、子どもは出生してもすぐ死亡することが多かった。そのため、愛情を

たっぷり与えた子どもがいなくなった時、悲しい、辛い思いをするのは耐え難いので、故意に冷淡、無関心を装ったのである。

1780年の報告によると、「パリで毎年出生する21,000人の赤ん坊の中、母親の手で育てたのはほぼ1,000人、他の1,000人の裕福な階層の人々の子は近くの乳母の手で育てられた。それ以外の19,000人の赤ん坊は田舎に教育費をつけて送りこまれた。(中略)18世紀のフランスで、貧民層に生まれた子どもの1/4は捨て子にされた。孤児院などでは、1年の中に平均20%が死亡した。パリでは82%、ルーアンでは90%にもなった」¹⁾のである。

両親が貧しいと、赤ん坊は養育費の安い遠隔地に送られた。荷馬車に大勢の赤ん坊が積み込まれ、時には太陽や風雨に曝されたり、凸凹道に赤ん坊が落ちて死ぬこともあった。そのうえ、里親が預かった子どもの面倒をよく見たかという、そうではなかった。次のような報告がある。これは、1764年2月1日、作曲家モーツァルトの父親が、パリからザルツブルクのマリーア・テレージア・ハーゲナウアー夫人にあてた手紙である。

「・・・パリではだれでもが新生児たちを田舎に養育にやります。(中略)このことは身分の高い人も低い者もすることで、わずかながらお金を払います。しかしまた、こうしたことまことに憐れむべき結果も見られます。これほどたくさんの、みじめで不具となった人たちでいっぱいになった土地は、容易に見つけられるものではありません。教会に一分でもいるかいはいか、それに通りを二、三本通るか通らないかで、盲の人、手足が不随の人、びっこの人、なかば腐りかかった乞食に出会いますし、あるいは、路上には子どものときに豚に手を食いとられたものが横になっているかと思えば、別の者は、子どものときに、養い親やその家族が田畑で仕事をしていたので、炉の火のなかにころがり落ちて、腕を半分焼き取られるといった具合です。」²⁾

また、ルソー (J.J.Rousseau)も『エミール』(Émile)の中で、当時子どもが不幸な状態に置かれていたことを述べている。

「子どもをやっかいばらいして、陽気に都会の楽しみにふけているやさしい母たちは、そのあいだに産衣にくるまれた子どもが村でどんな扱いをうけているか知ってるのだろうか。ちょっとでもことが起こると、子どもは古着かなんかのようにつまみつけられる。乳母がゆうゆうと用をたしているあいだ、みじめな子どもはそうして釘づけにされている。こういう状態で見られた子どもはいずれも顔が紫色になっていた。」³⁾

このように、この時代、子どもは虐待されていたし、間違った育児法が支配していた。

「当時の赤ん坊は、生まれるとすぐに産着の上から木綿の布地でグルグル巻にされ、手も足も動かせないようにしておかれた。赤ん坊の身体は柔らかく固まっていないから、こうでもしなければ、どんなに不格好な姿になるかわからないという恐怖心があった。」⁴⁾

次に経済的状況に目を向けよう。ヨーロッパの農業成長期は、11世紀半ばから13世紀半ばまでで、14、15世紀には停滞した。とくに16世紀後半から18世紀初頭にかけて、ヨーロッパを襲った寒波が農民の生活を苦しめた。他方、イギリス産業革命の影響で、紡績業を中心とする産業化の波がスイスにも押し寄せてきた。

スイスでは、まだ封建制度が支配しており、その重荷に農民は耐えねばならなかった。農民は自由な身分ではなく、自分たちの生産物を売ることもさへ自由にできず、町の商人の手を通さなくてはならなかった。

ペスタロッチーは、農業が工業に代わるなら、農民の思考法は変わるだろうと考えた。彼は国民のために、絶対主義や専制政治を排除し、民主主義の精神で最下層の人々の精神的・道徳的促進を図ろうと欲した。

アールガウ、チューリッヒ郡では、70年代の末、全住民の半数はまだ農業を営んでいた。しかし、綿糸紡績工場ができると、百姓はここで働くようになった。そのため、土地を耕すこともなくなり、

土地は荒れ放題になった。かつては、百姓達は一抱えの藁や乾草をも大切にするように親から教わってきたのだが、その教えはもはや守られることもなくなった。彼らは現金を持つこともなかった村に、沢山の賃金をもたらした。しかし、彼らはお金の使い方も、蓄え方も知らず、結局怠惰な生活をするようになった。

では、この頃、ペスタロッチー自身はどんな生活を送っていたのであろうか。

1774年に始めた貧児・孤児を集めての教育事業、貧児教育院は綿布工場を敷設したものの、経営は思わしくなく、1780年には閉鎖の止む無きにいたった。にも拘らずこの間、著作活動をし、1774年には『育児日記』(Tagebuch Pestalozzis ueber die Erziehung seines Sohnes)、1777年、1778年には『ノイホーフだより』(Auf Saetze ueber Armenanstalt auf dem Neuhoefe)、1780年には『隠者の夕暮れ』(Die Abendstunde eines Einsiedlers)、1782年には『スイス週報』(Ein Schweizer-Blatt)を發表した。

さらに、1779年にバーゼルのある協会が懸賞論文を募集した。そのタイトルは「商業によって繁栄する小さな自由国家においては、個人の出費をどの位制限するのが望ましいか?」(In wiefern ist es schicklich, dem Aufwande der Buerger in einem kleinen Freistaate, dessen Wohlfahrt auf die Handelschaft gegruendet ist, Schranken zu setzen?)であった。ペスタロッチーはこれに応募した。その内容は、以下のようなものであった。

商工業の自由は強調されねばならない。しかし、奢侈な生活は慎むべきである。その防止のために、禁止や規則を設けるのではなく、教育によって人間自身を高めること、即ち、一人一人が物質的欲望を抑制し、高尚な精神の持ち主になることが肝要である。さらに、富める者が貧しき者を愛することが大切であること、また、貧民の手の届かないような贅沢三昧な生活を戒めたのであった。

この論文は見事入賞し、彼の名声はますます広まったのである。

ところで、既に述べたように、彼は1780年には無念にも貧児教育院を閉鎖しなければならなかった。ここで、彼は貧しい人々の貧困生活を身をもって体験したのである。茫然自失の状態にいたこの時突然、若い女性、リザベート・ネーフ(L. Neef)が来訪し、奉仕を申し出た。

彼女は、宗教戦争に偉勳があつて、チューリヒの市民権を授与されたネーフ家の一族である。かつてペスタロッチーの親族の家に仕えていたが、その家の主人が亡くなったために、この家を出て、ペスタロッチー家に奉仕しようと決心したのである。

ペスタロッチーは、自分や自分の家族のために若い女性を犠牲にするに忍びなかったが、彼女の決心が堅かったので、結局彼女の願いを受け入れたのである。

リザベートは、無教養であったが、信仰心が厚く、謙譲の美德を持った女性であった。そして、家政、耕作、ペスタロッチーの一人息子ヤーコブの世話等を骨身を惜しまず引き受けた。特に、荒れ放題の農場をよく耕し、菜園の労をとったりした。何よりも、病弱なヤーコブを恰も自分の子どもでもあるかのように面倒を見たのであった。

ヤーコブは、1782年に、商業見習いのためにバーゼルのペッフェル学校に入学した。

ペスタロッチーはと言うと、1783年から1787年にかけて、『リーन्हルトとゲルトルート』第二部、第三部、第四部、『立法と嬰兒殺し』(Gesetzgebung und Kindermord)等を發表した。

さて、『リーन्हルトとゲルトルート』第一部について再度記すと、この書は1781年匿名で出版された。本書が人々の興味を惹いたのは、当時の小説界の退廃的な傾向と対照をなしていたからであるが、そればかりでなく、ある村落の種々な事件が微に入り細に入り、しかも愛情をもって描写されていたからである。すべての新聞雑誌はこれを推奨した。したがって、ペスタロッチーの名前は後に『エフェメリデン』で公表され、彼は色々な方面から喝采を浴びた。

ベルンの農業組合は、ペスタロッチーに書状と賞金および金メダルを贈った。また、地位ある人々は、彼に称賛の言葉をかけたり、食事に招待したり、訪問したりした。けれども、ペスタロッチー

は、そのような称賛や名誉には無頓着であり、まもなく金メダルを生活のために売却したのであった。

ところで、ペスタロッチャーが懸賞論文で賞を得たことや、『リーンハルトとゲルトルート』が大衆の絶賛を博したことは、彼の文学的才能が並外れていたことを示すものである。以下のことは、このことを証明するものであろう。

ペスタロッチャーの戯曲『キューニグンデ』(Kuenigunde)は、『スイス週報』に収められている。この戯曲が、彼の生誕200年を記念して、1946年にバーゼルの市立劇場で上演されたのであった。教育学者ガンツ(H. Ganz)によれば、「観客に情緒的緊張の混じった好奇心と驚嘆を引き起こした」のであった。⁵⁾

また、この戯曲は1980年3月15日と21日にスイスでラジオ放送されたのである。そして、ここでも18世紀末に執筆されたものであるにも拘わらず、聴衆の心を揺さぶったのである。

では、本題の『クリストフとエルゼ』に入ることにしよう。

ペスタロッチャーは、この作品について以下のように言っている。

「イーゼリン(I. Iselin)が亡くなる数週間前に、彼は私に次のような手紙を送ってくれた。この時私は有頂天になって喜んだ。」⁶⁾

この手紙の内容は、「私はあなたの『第二の国民の書』である『クリストフとエルゼ』を、一種の敵意を持った偏見を抱いて読み始めました。しかし、読んでいけばいくほど私はそれが気に入ってきました・・・確かにそれは『リーンハルトとゲルトルート』のようには読まれないでしょうが、しかし、根本的には、さらに一層有益で立派です」⁷⁾というものであった。

なお、ペスタロッチャー自身がこの書について言っていることを挙げよう。

「第一の書と第二の書との私の労苦は、煙草をくゆらせることと石を運搬することのように、相違していた。しかし、私はこの第二の書を、民衆にとって不可欠のものと思っし、また実際に、この書が二、三の役人や教師達から一種の称賛を獲得したことは嬉しいことであった。誰でもが容易に喜ばせることのできるような幼稚な読者に喝采されるよりも、その方がずっと効果があるであろう。しかし、何と言っても、イーゼリンが私のこの方面の試みをやはり正しいと認めてくれたことは、私にとってこの上ない喜びであった。」⁸⁾

3 『クリストフとエルゼ』における教育論

『クリストフとエルゼ』には、次のような副題がついている。「クリストフとエルゼが夕べのひととき『リーンハルトとゲルトルート』を読む」(Christoph und Else lesen in den Abendstunden das Buch Lienhard und Gertrud)つまり、百姓夫妻クリストフとエルゼが『リーンハルトとゲルトルート』の第一巻の二十七節までを毎晩一節ずつ三十夜読み、子どもフリッツと召使ヨーストがこれ聞いて、皆で著者の言わんとすることを話し合うというものであり、対話形式で書かれている。

では、『リーンハルトとゲルトルート』の第一巻の概略を述べることにしよう。

ボンナル村の貧しい石工リーンハルトとその妻ゲルトルートには、七人の子どもがある。村の税吏フンメルは居酒屋を経営し、村人を誘惑して酒を飲ませ、金儲けする悪党である。正直者で気の弱いリーンハルトは、フンメルに強迫されて酒を飲まされ、賭博に誘われ、給金を奪われてしまう。宗教的情操の深い、良き妻であり、立派な母親であるゲルトルートは夫に忠告するが、リーンハルトはフンメルの誘惑の手から逃れることができない。そこで、ボンナル村の城主アーナーに相談する。

夫はフンメルに酒代30グルテンの借金があること、フンメルはあの手この手で夫をかどわかせ、酒代は増え、そのためにパンを買うお金さえなくなってしまうことを話し、七人の子どものために苦心して貯えたお金を借金の返済ができるまで預かって欲しいこと、そしてフンメルが夫を威嚇しない

よう尽力頂きたいと懇願し、七個の財布を城主に差し出した。

七個の財布には、それぞれ子どもの名前が記してあった。そして、パンを買うためにやむを得ずこれらの財布からいくらかでもお金を取り出した時には、それを借金として記録し、一生懸命に働いて、出来るだけ早く取り出した額をその財布に戻すことにしていた。

フンメルの狡猾さに激怒を感じた一方、妻および母親としてのゲルトルトの情愛の深さに心を打たれた城主は、子ども達の財布にそれぞれ若干のお金を入れ、30グルテンの借金は自分が返済すること、また、明日フンメルに会って問題を解決すると言い、ゲルトルトを安心させた。

やがて、城主はフンメルを諫め、リーन्हルトに村の教会を建設する仕事を与えた。

(1) 居 間

『クリストフとエルゼ』において、ペスタロッチーが強調したかったのは、何と云っても居間(Wohnstube)の称賛であろう。居間は、愛情に満ちた、安らぎを与える場でなければならない。

ゲルトルトをして城主のところへ行かせたのは、夫や子ども達への愛情であり、何としても家族を不幸にしたいくないという強い信念であったと思う。

以下の叙述は、居間の最も大切な役割を表わした箇所である。

「人間には自分の心をいつでも温めてくれる暖炉のようなものが必要である。その役割を果たすのが居間なのである。」⁹⁾

また、居間は愛情ばかりでなく、教育の場でもあるのだが、陶冶の素材はいくらでもある。このことは、次のくだりに現われている。

「子ども達を生涯の至るところで必要な秩序正しさと思慮深さに導くのに、居間よりもっと適当なところがあるだろうか。居間より適当なところは考えられない。」¹⁰⁾

これは、家庭におけるしつけの大切さを意味しているのではないだろうか。子ども達は、居間のごく自然の生活の中で、親の態度、振る舞いを見ながら、さまざまなことを学び取っていく。

家庭により、親の職業により、子どもが学び取っていく内容は異なるであろうが、ここでペスタロッチーは職業陶冶についても主張したかったのである。

「子どもを立派に教育する上で、一番肝心なことは、子ども達をそれぞれの家庭にふさわしく、正しくしつけることなのである。子どもは日々の糧と安息とを与えてくれるものを特に知らなければならないし、実行し、着手する術を学ばなければならない。」¹¹⁾

また、ペスタロッチーの場合、人間の諸力を頭、心、手に分け、この三者が調和的に発展することが肝要であった。

「人が本当に自分を高めようと思うなら、居間こそ確かにその場所を得ている。なぜなら、居間の仕事の対象は、大概は種々のものが混然一体をなしているもので、同時に頭と心と手とを個々別個にではなく、相互に関連させながら働かせなくてはならないからである。・・・人は居間で確実にますます有益な人間になっていくのである。」¹²⁾

人は、居間で愛され、安らぎを感じ、色々なことを学んで、自分の天職に就き、仕事に励むことができるのである。植物に例えると、苗床で植物に水や肥料を与えたり、雑草や石を取り除いたり世話をするように、人の子も面倒を見てもらったり、教えられたりする必要がある。そして、植物が生長し、青々と葉を茂らせたり、花を咲かせたりするようになれば、他の土地に植え替えようと、生長を続けるだろう。人間も居間でさまざまなことを修得すれば、やがて社会に出て自分の使命を立派に果たすことができるのである。

ところで、ペスタロッチーは当時の親に対する批判もしているのである。他の作品でもそうであるが、恰も彼が現在生きているかのように、辛辣な親批判をしているのである。

「自分の部屋の中や自分の心の中に、子どものためになるあり余るほどの教訓を持っているくせに、何百何千という物分りのよい実直な人間が、それらを忽せにし、無視し、子ども達に授けないのである。」¹³⁾

ペスタロッチーは、居間の陶冶性についての思想を晩年になっても持ち続けていた。

『七十三歳の誕生日の講演』(Rede am dreiundsiebzigsten Geburtstage)で、居間の陶冶性を確信を持って主張したのである。

「すべての家庭の居間の中に、真の人間陶冶の本質的な根本手段が全部集まっている。このことは、議論の余地がありません。」¹⁴⁾

(2) 教師論

ペスタロッチーは、時として、この時代の学校や教師を批判している。当時の学校は、子ども達の興味や自発性を無視し、体罰が当然のこととして行われていた。したがって、学校は子ども達にとって、楽しいどころか、重圧的な、屈辱的な場所であった。

こんな時代であったからこそ、ペスタロッチーは、学校の家庭化を主張し、実践したのであった。

「少なくとも学校の教師は、偏見がなく、明朗で、人間的で、愛情豊かで、敬虔な人でなくてはならない。というのは、村の子ども達は恰も父親の心に触れるような気持ちで、教師の下で成長していかなければならないからである。学校の教師とは、子ども達の心と口とを開き、自然に身につけた分別や、母親のような機知を心底から誘い出すのにふさわしい人柄であるべきである。しかし、残念ながら、現在のところ大概のところでは、事情は正反対である。」¹⁵⁾

ペスタロッチーは、子どもの頃から勇敢で、正直で、率直で、熱血漢であった。だから、教師に対しても、厳しい目を持っていた。それは、以下の叙述からも理解できよう。

「ペスタロッチーは、音楽に興味も才能もなかった。ある音楽の時間に、酔っぱらっていた教師が、ぼんやりしていたペスタロッチーをタクト棒で打った。ペスタロッチーは、烈火の如く憤り、学級担任のところへ行き、あの教師の授業は二度と受けたくないこと、それが許されないなら、即時退学すると言った。学級担任は、ペスタロッチーの言葉には道理があると認め、音楽の授業にはもう出席しなくてよいと言った。」¹⁶⁾

後に、シュタンツの孤児院で、僅か五ヶ月であったが、ペスタロッチーは学校の家庭化を自ら実践した。即ち、家庭のよい面を孤児院に取り入れたのであった。母親は、毎日子どもの顔を見ることによって、子どもの健康状態や精神状態を読まなければならない。そして、父の力によって家庭生活が活気づいていなければならない。このように考えたペスタロッチーは、子ども達が同居し始めた最初から、兄弟姉妹のように過ごさせ、家庭的な雰囲気醸成し、自然な形で学ばせた。

「私の心が私の子ども達に愛着を持っているということ、彼等の幸福は私の幸福であるということ、彼等の喜びは私の喜びであるということ、こうしたことを私の子ども達は、朝早くから夜遅くまで、いつでも私の顔の上に見、私の唇の上感ずるはずだった。」¹⁷⁾

こうして、約70人の我儘な乞食の子ども達が、普通の家庭でさえ滅多に見られないような、なごやかな、愛情に満ちた生活をするようになった。

また、ペスタロッチーの最後の事業であったイヴェルドンの学園(1805~1825年)では、「彼は彼の協力者達に、教育が親心に由来し、子心を活気づけねばならないことを身をもって示した。協力者達もまたその権威を、罰の上ではなく、愛の上に基礎づけるべきであった。しかし、罰が必要な場合には、それもまた愛から出て来なくてはならなかった」¹⁸⁾のである。

さらに、「イヴェルドンの学園の生徒達が聡明に見えたのは、教育が合自然的であったからである。そして、彼らが幸福であったのは、教師と生徒との間に、友情と信頼がみなぎっていたからである。

学園の最盛期には、親密な援助の精神が学園にゆきわたっていたし、また、ペスタロッチーは、『これは学校ではない。家庭だ』と言うある農民の言葉を、学園に与えられた最大の賛辞と見做した¹⁹⁾のである。

(3) 道徳的教訓

ペスタロッチーの著作の中には、道徳的教訓が散見される。

『リーンハルトとゲルトルート』で、城主に援助の手を差しのべてもらったゲルトルートは、子ども達に次のように言った。

「お前達が、私とお父さんとが幸福であるようにお祈りするのと同じように、アーナー様が幸福であられるように毎日お祈りしましょう！ アーナー様はこの土地のすべての人が幸福であるように、心を遣って下さいます—あの方は、あなたがたが幸せであるように心を遣って下さいます。—だからあなたがたはしっかりして、物分かりがよくなり、よく働けるようになったら、私やお父さんを愛するように、アーナー様を愛するようになるでしょう。」²⁰⁾

子ども達は、ゲルトルートの言ったことをよく理解し、この日から朝晩父母のためにお祈りする時には、この土地の父であるアーナーのためにも祈りを捧げたのである。

村民の安寧に心を痛めるアーナーの親心と、村民のアーナーへの信頼という子心、子ども達への限らない愛情というゲルトルートの親心と、子ども達のゲルトルートへの信頼という子心が読み取れる。

また、『リーンハルトとゲルトルート』の十二節で、ゲルトルートは夫が帰宅するまでに、家事をきちんとしたり、子ども達の世話をしたり、歌を教えたりして過ごした。父親が帰って来ると、子ども達は習った歌を披露した。父親は家庭の幸せをしみじみと感じ、涙を浮かべた。

この場面について、『クリストフとエルゼ』では以下のように言っている。

「これは、私のために書かれた節みたいです。自分の子ども達を教え導く実直な母親を、私はこの大地で一番美しいものだと思います。」²¹⁾

感動的なシーンは、その他にもある。その一つとして、『リーンハルトとゲルトルート』の十六節～十八節を挙げることができる。

貧乏なヒューベルルーディの母親カトリーネは、病気で死の直前にある。それにも拘らず、ありったけの力を振り絞って、孫のルデリがゲルトルートの家の馬鈴薯を盗んだことを諷め、ゲルトルートのところへ行って、謝罪するように言う。そして、父親にその償いとして二、三日リーンハルトの下で働くように付け加える。勿論、ゲルトルートは馬鈴薯を盗んだことについては、ルデリを厳しく叱るが、死の直前にあるカトリーネを元気づけ、安心させる。

『クリストフとエルゼ』では、カトリーネもゲルトルートに劣らず理想的な女性として称えられている。そして、カトリーネが孫を改悛させたことを強調している。

「親が子どもの過ちを指摘し、そうした悪習を退けようとした時、しかも子どもの方が即座に、『僕は愛されているんだ』と暖かい気持ちで確信し、感動したとしたら、これこそ優れた教育の中での傑作である。」²²⁾

ここでは、瀕死の祖母が力の限りを尽くして、罪を諷めたことが、ルディにとっては言葉では言い尽くせぬほど感動的であっただろう。子どもに過ちを指摘したり、叱ったりする場合、何とかして子どもに分からせようと、親は冷静に、噛んで含めるように、言うのであるが、「愛されているのだ」ということは、その場では理解できず、大体は後になってから気づくものである。

また、ここで以下の言葉もペスタロッチーの名言として挙げておこう。

「故人の回想を重く見ることは、常に家庭生活にとって最上の絆である。『去るものは日々に疎し』

と言われるが、これは常に墮落した家庭生活の最も確実な標識である。」²³⁾

祖先を敬うことも、亡くなった家族を追想することも、美德である。亡くなった人に対しては、例え悪いことでもすべてがよく思われるものである。愛する故人は、常に心の中に生きており、回想する人を励まし続けるのである。故人を回想することは、一時的にその故人を生き返らせることであると思う。

さらに、次の言葉も人の生き方として考えさせるものである。

隣人の苦悩のすべてを、身を持って感じ、慰めと愛の言葉をかけた立派な人の死に対して、子どもに言って聞かせる場面である。

「人の喜びをすべて自分の喜びのように喜び、人の苦しみを自分の苦しみのように心を痛める。このような生き方をすると皆に好かれるのである。」²⁴⁾

他人の苦しみを理解することさえできない人もいるが、他人の苦しみを理解するのは、さほど困難ではない。しかし、他人の喜びを自分の喜びのように喜ぶのは難しい。

ここで、他の作品ではあるが、感動させられる場面を取上げよう。

シュタンツの孤児院での体験であるが、ここには道徳的な教訓が数多ある。ちなみに一つだけ紹介しよう。

ペスタロッシーが、子どもに体罰を与えたところである。

「私の一番可愛い子どもの一人が、私から十分愛されているのをいいことにして、不当にも他の一人を威嚇した。そのことが私を激昂させ、私はひどく打擲して私の憤懣を彼に感じさせた。その子どもは悲しさのあまり、十五分間も泣き続けた。そして、私が室外に出るか出ないうちに立ち上がって、自分のことを告げ口した子どものところへ行って詫言、自分の乱暴な振舞を告発してくれたことに感謝した。それは芝居ではなかった。」²⁵⁾

ペスタロッシーと子ども達の間には、深い信頼関係があったので、体罰によって子ども達が彼から遠ざかることはなかったのである。

4 おわりに

以上、『クリストフとエルゼ』における教育論を筆者なりにまとめたのであるが、ペスタロッシーの著作はいずれも体系的に書かれているわけではないので、まとめるのはさほど容易ではなかった。

既に述べたが、『クリストフとエルゼ』では『リーンハルトとゲルトルート』一部の十七節までを対象にしているので、その後のことがここでは理解できない。後の方では、村の悲惨な状態が何故起こったか、さらにそれらの克服、村や学校の改革が記述されている。

先に述べたように、ペスタロッシーは二つの作品を執筆した時のことを、煙草をくゆらせることと石を運ぶことというように、比喩的表現をしたが、確かに、その表現は妥当であると思われる。

前者は村の貧しい家々の色々な事件を通して、また、色々な場面を通して、生き生きと村民の生活の様子や感情が描写されていて、興味を惹く。彼は人々の知的・道徳的向上や、村の改革を念頭に置きながらも、思いつくまま楽しみながら執筆したのだろう。しかし、後者は各節毎の内容についての討論や概略が記述されており、相当な苦心をしたことが想像できる。

ここでは、何と言ってもゲルトルートが主人公である。ゲルトルートは、ペスタロッシーの母親、忠実な下女のバーベリー、ある時突然奉仕を申し出て、献身的にペスタロッシー家に尽くしたりザベートの三人がミックスされて理想的な妻として、母親として描かれている。

城主のアーナーは、村民のために心血を注ぐ名城主であり、こんな主君は滅多に存在しないであろう。城主と村民、親と子どもは親心・子心で結ばれている。

ペスタロッシーは、居間を聖なる場所 (heiliger Ort) とか天国 (Himmel) という言葉で表現し

ている。彼にとって、居間は人間の陶冶に対して最も根源的なもので、そこからすべての物が発展していく場である。

彼が18～19世紀初頭に説いたことが、今も実に新鮮な言葉として胸を打つのは不思議である。

次のくぐり、ペスタロッチーの思想をいとも的確に表わしている。

「教育の淵源は家庭にあり、家庭の中心は母にあり、母賢なれば家ととのい、一家ととのえば一郷治まり、延いて全国の民風自ら純良の域に進むべし。」²⁶⁾

【注】

- 1) 有地 亨 『日本の親子二百年』新潮社 1986年 20～21ページ
- 2) 海老沢敏・高橋英郎編訳 『モーツァルト書簡全集1』白水社 1990年 118ページ
- 3) ルソー著・今野一雄訳 『エミール』上 岩波文庫 1988年 36ページ
- 4) 本城靖久著 『十八世紀パリの明暗』新潮社 1989年 187ページ
- 5) 福田博子著 『劇作家ペスタロッチー』日本女子経済短期大学研究論集39号 1980年
- 6) J. H. Pestalozzi : Des Schweizerblats Zweytes Baendchen, Pestalozzi Saemtliche Werke. hrsg. v. A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, Berlin und Leipzig 1927 Bd. 8, S. 248
イーゼリン (1728～1782) はバーゼル市の有名な書記であり、その妻と共にしばしばペスタロッチーを招待し、彼に文筆上の忠告を与え、『エフェメリデン』に彼の最初の文筆上の労作を発表してやった。イーゼリンが亡くなった時には、ペスタロッチーは『スイス州法』に彼の追悼文を掲げた。H. モルフ著・長田 新訳『ペスタロッチー伝』第1巻 岩波書店 1939年 181 ページ
- 7) Ebenda.
- 8) Ebenda.
- 9) J. H. Pestalozzi : Christoph und Else, P. S. W., Berlin und Leipzig 1940 Bd. 7, S. 292
- 10) Ebenda, S. 260
- 11) Ebenda, S. 248
- 12) Ebenda, S. 349
- 13) Ebenda, S. 248
- 14) J. H. Pestalozzi : Rede von Pestalozzi an sein Haus, P. S. W., (Kritische Ausgabe) Orell Fuessli, Verlag, Zuerich 1974 Bd. 25, S. 312f.
- 15) J. H. Pestalozzi : Christoph und Else, S. 252
- 16) 玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』玉川大学 1980年 11ページ
- 17) J. H. Pestalozzi : Brief an einen Freund ueber seinen Aufenthalt in Stanz, P. S. W., Berlin und Leipzig 1932 Bd. 25, S. 8
- 18) K. Silber : Pestalozzi, Heidelberg 1957 S. 191
- 19) Ebenda.
- 20) J. H. Pestalozzi : Lienhard und Gertrud, Erster Theil. P. S. W., Berlin und Leipzig 1930 Bd. 5, S. 20
- 21) J. H. Pestalozzi : Christoph und Else, S. 293
- 22) Ebenda, S. 293
- 23) Ebenda, S. 322
- 24) Ebenda, S. 332
- 25) J. H. Pestalozzi : Brief an einen Freund ueber seinen Aufenthalt in Stanz, S. 19
福田博子著『ペスタロッチーの“シュタンツだより”についての考察』秋草学園短期大学紀要16号 1999年を参照されたし
- 26) 福田博子著『ペスタロッチー断片』嘉悦女子短期大学研究論集45号 1984年 140ページ

(受理日：2005年1月12日)

